

IAUD Newsletter vol.2 第12号 (2010年3月号) 目次

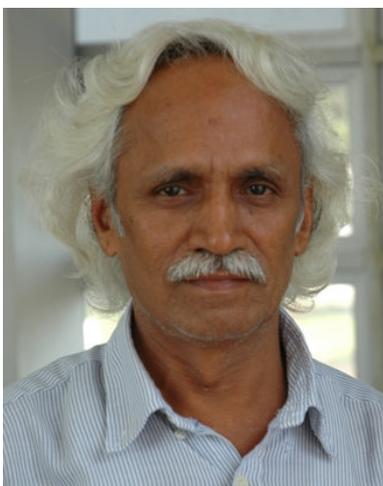
1. 特集① : *towards2010* 「The White Imperative」 ～人間の多様性に対する我々の責務～
シンガナパリ・バララム教授 (インド) からの寄稿 1
 2. 特集② : *towards2010* 研究開発企画部会 PJ/WG 主査対談
～2009 年度振り返りと国際会議にむけて～ 6
 3. ヤマハ株式会社 ユニバーサルデザイン「ヤマハにできること」
～2010 年国際 UD 会議に向けて 19
 4. 世界の UD 動向 : 「サステナブルデザイン国際会議」、「インクルーシブデザイン・ナウ」、
「ユニバーサルデザイン全国大会」、【UD2010 ウォッチング】ほか 23
- 巻末: IAUD Newsletter 2009 年度バックナンバー

今年度の特集テーマ *towards2010* として、6月号では米国から IHCD のヴァレリー・フレッチャー氏に、12月号では英国から RCA のロジャー・コールマン名誉教授からそれぞれの地域における UD の最新動向と今年度の国際会議への期待などをご寄稿いただきました。今年度最終号となる今月は、変化の渦中にあるインドで南北問題を中心に研究されているシンガナパリ・バララム教授にご寄稿いただきました。欧米とは大きく異なる視座での課題提起は、地球規模での調和を目指すとき深い示唆を含んでいます。

また、特集②として IAUD の活動の核となっている研究開発企画部会から布垣副部長と各プロジェクト/ワーキンググループの主査の方にお集まりいただき、成川理事長、川原専務理事と今年度の振り返りと国際会議や今後の IAUD の活動について、白熱した意見交換をしていただきました。

特集① : *towards2010* The White Imperative ～人間の多様性に対する我々の責務～

DJ デザイン・アカデミー(インド)
教授 シンガナパリ・バララム



変化への挑戦

世界は今までになく急速に変化しています。
 世界は今日、もう異なる国で成り立っている訳ではありません。
 通信革命やグローバリゼーションのお陰で世界はひとつになりました。
 世界はもはや球体ではありません。トーマス・フリードマン (Thomas Friedman) が正しくも述べているように、世界はフラットです。距離はなくなり、時間は瞬時となりました。情報はボタンひとつで入手でき、コミュニケーションは“いつでも、どこでも”可能となりました。
 デザインも当然ながらこの変化への挑戦と無関係ではあり得ません。デザインの定義についての今までの見方は変化しました。

デザインは今やもう問題を解決する活動ではなく、人に満足を与える職業です。機能や楽しみから形が生まれるのではなく、人から形が生まれるのです。

デザインには古いしきたりに挑戦する力があり、またそのことが QOL や社会環境を改善していくという類のない能力を持つただひとつの職業です。デザインにはまた、市場の動向に影響を与えたり、日常生活での社会・文化面の経験を改善するという他にはない能力があります。人の物の見方に影響を与えることができるという意味でデザインには偉大な力があります。偉大な力には偉大な責任が伴います。

信頼できるデザイン教育によって若者の心に優れた価値体系を植えつけなければなりません。デザインすることで人々に統合された社会を作ろうという気にさせるべきです。しかし現在、携帯電話やコンピュータ、アイポッドなどの必須アイテムによって個性が過剰なまでに助長され、社会はばらばらになりつつあります。

ユニヴァーサルデザインは、インクルーシヴデザインやアクセシブルデザインと同義か？

ユニヴァーサルデザイン(UD)、インクルーシヴデザイン(ID) やアクセシブルデザイン(AD) の相違点とは： UD は物事や環境面で何も特化しないことに重きを置いています。一方 ID は排除しないことを重視し皆のノーマライゼーションを唱えるものです。AD は専ら障害のある人たちが利用しやすい製品や建物だけに重きを置いています。UD は‘デザインフォーオール’とも言い、障害を持つ人達を含む全員にアクセシブルで利用可能であることを提案しています。

重要なのは限定された用語が何を提供できるかではなく、UD について幅広い概観を描くことです。UD は社会的なサステナビリティのために非常に重要な課題であると私は考えています。UD とは本質的に、“個人の特性に敬意が払われる持続可能な社会環境を創る” ことなのです。

社会的な持続可能性は将来、最も重要で欠かせないもの 2 つのうちのひとつです。

1. グリーン・インペラティブ*：生態学的サステナビリティ：自然の多様性に関する問題
2. ホワイト・インペラティブ*：社会的サステナビリティ：人間の多様性に関する問題

*訳注：インペラティブとは、責務あるいは回避できないもの

白色は全ての異なった色の鮮やかな統合であり、世界を美しく見せてくれます。サンスクリット語では“*Shweta*” と言い、知性と悟りを表します。

UD とは違いを受け入れる姿勢であってスタイルではない

世界的にみて健康が改善し高齢化も進み、多くの人々が疾病、けが、先天異常を乗り越えています。このことは緊急のグローバルな関心事となり、UD に対する見方を変えました。

WHO は 2001 年、障害を相関性のある経験として再定義しました。障害を“ある決まった割合の人工区分に現れる現象ではなく普遍的な人間の経験” とみなしています。デザイナーにとって重要なのは、障害を環境と個々人の相互作用の副産物であると見直していることです。

UD の全体的な課題は以下のことに煮詰まります： すなわち UD とはいかなる形であれ現れる違い、多数者としての“我々” と少数者としての“他者” “との違いに対する我々の姿勢なのです。H. G. ウェルズ (H.G. Wells) の見事な著作“the Valley of the Blind” (盲人達の谷) にあるように、誰が正常で誰が異常かを数が決めます。この“違い” と“他者” の概念は、現代のデザインを学び実践するには欠かすことができません。

ノーマライゼーションというのは違いをないがしろにすることでも、“他者” を“我々” として受け止めることでもありません。どちらも誤りです。違いは認めなければならないが、同情や見下した扱いをすることではなく、尊重され促進されるべきです。

“違い” のない生は停滞し、“他者” がいない社会は完全ではありません。

違いとは敵ではなく仲間か？

“世界を動かしているものは、様々な違いの間の相互作用であり、それらの間の引力や斥力なのである。生は様々であるが死はひとつである。” —オクタビオ・パス(Octavio Paz)

“問題はいかに違いを取り去るかではなく、いかに色々な違いを巧みに一体化させるかである。”
—ラビンドラナート・タゴール(Rabindranath Tagore)

違いというのは変化であり、変化は避けられないばかりか生きるにはなくてはならないものです。身体を横たえた人間が寝返りを打てなければ床擦れになってしまいます。花瓶の中の花のように美を創造するには違いをうまく体系づけることが必要です。

違いは分裂や同族主義を導くのではなく、交流によって相互に高め合うべきです。

違いについての我々の体験には4種類あります

1. 経験したことがない
2. 一時的に経験したことがある
3. 中間的な違いの経験
4. 先天的な違い

違いに関する姿勢を推し進めるためにこの分類は重要です。

主な違い/障害と我々の軽視

我々は通常身体的能力や精神的能力についての違いに焦点をあてますが、その他についてはないがしろにしています。

1. 身体的能力
2. 精神的能力
3. 年齢
4. 先天異常(アノマリー)
5. 性差
6. 社会階級
7. 人種
8. 民族性
9. 宗派
10. 読み書き能力(リテラシー)
11. 言語
12. 文化

UDは将来の統合された社会へ向けての我々の責任です

責任には次の段階があります。

1. 個人の責任

- “同情”を避ける。必要なのは思いやりや共感。違いをないがしろにするのではなくそれを認め受け入れること、たとえば男性と女性。
- 互いの価値を高めようとする心
高齢者には豊富な経験や蓄積された英知があり活用されるべき。資金や時間もあり、時には若者や子供に助けとなる評判やコネを持ち、同時に若者は身体介護や時間を共にしたり愛情を与えることができる。
- 包括的な環境や製品に関する意識

2. 組織での責任

- “人との違いを認めて愛し生活すること”を小学生から教育することが必要。
- デザインスクールでは全員が“相違を受け入れる”ことについてのプロジェクトに最低ひとつ参加するべき。
- “多様性へのデザイン”の学部を設けるべき。
- 多様性へのデザインの修士大学院

3. 企業の責任

- CSRの意識向上
- UDプロジェクトへの様々な方法での財政支援
- 雇用政策、工場、オフィスなどでUDを採用し良い見本となること。

4. 政府の責任

- UDを促進する政策の導入
- 政策の促進
- 税優遇などのインセンティブの提案

人口統計：インドと世界

医療の向上で平均寿命は伸び死亡率は減少しました。また新しいライフスタイルにより出生率は減少しました。人口統計によると60歳以上が世界で毎月120万人増加し続け、このままいけば2050年には人間史上初めて老人が子供の数を上回ります。

大多数の国では劇的な変化が予想されます。2050年には60歳以上の中国人が4億人ですが、一方その年に日本の全人口はたった6,900万人です。

国連の調査によると、現在インドの60歳以上の人口が全人口に占める割合は7.5パーセントですが、2050年には20パーセントに達すると予想されています。

世界で6億人以上が何らかの障害を抱えて生活しています。その中で4億人以上が私が多数世界と呼んでいる発展途上国で生活しています。

インドには世界の障害者人口の3分の1つまり6,300万人が生活し、これは英国の総人口5,900万人を超えています。地方の障害者は都市部の障害者の3倍です。

インドのグローバリゼーションは都市部に高成長をもたらしましたが、地方ではインフラの整備不足と貧困をもたらしています。インドは世界で最も若い国ですが、子供のケアができません。高齢者人口は増加していますが合同家族システムは崩壊しています。インドは女性が長として支配していますが、その女性人口が減少しています。現在これは表立って問題とはなっていませんが今後重要な懸案事項となります。インドはこのように様々な要素を抱えており、社会的にも技術的、経済的にも途方もない変遷を遂げようとしています。前産業文化、産業文化やIT文化が、時には大きな調和をもって、時には混沌として共存しています。インドのUDに向けての活動は他の国々に比べると些少であることはうなずけます。

インドにはUDに関して知られていない3つのユニークな強みがあります

1. 他に並ぶもののない多民族社会の経験。言語、文化、宗教における広大な多様性に長い間取り組んでいます。
2. “布一枚がすべて”(one cloth - fit all) (サリー、ドーティー、ルンギー、ガムチャなど)を例とする多面的な包括性の伝統。
3. 高齢者、障害者や弱者への尊敬と義務に関する生活規範。ヒンズー教の經典にはShravana、KubjaとAshta vakraの規範があります。

デザイナーの役割

現在、インドのデザイナーの多くはUDについての経済的、社会的、心理的な問題についてほ

とんど理解していません。彼らは UD を障害者のためのデザインや高齢者のためのデザインなどと混同したり、UD を高価なデザインであると見なすなど全く誤った考えをもっています。本当のところUDは高価でも複雑でもありません。デザインしたり企画するにあたっては多様性へのちょっとした配慮が必要なだけです。次に掲げるような小さな、費用のかからないアイデアが、我々の生活に世界に通じる質を作り出すのに大いに役立つでしょう。

スロープ

触ってわかる進路案内や標識

視・聴覚同時案内

車内と乗降口間の段差解消

トイレの手すり

二ヶ国語標識または見てわかる標識

スイッチの高さを低くする

入口の拡張など。

UDのデザインプロセス

UDを取り入れたデザインには次の要素が求められます。

1. 障害を持つ人を含むユーザー全員が最新のテクノロジーの使用と恩恵を享受できること。
2. デザイナーはシミュレーションの訓練を通して違いや障害の経験を持つべき。
3. デザインの開始からユーザーの参加が必須。
4. 方法としてのUDが、政策を実施しないことへの口実や、個別的な調整および支援技術を請け負わないことへの口実であってはならない。

UDとビジネス

どの業界でも株主に対する責任として利益が最優先されます。これを受け入れることでUDが必ずしも利他主義とはならないと申しあげておきます。UDは次の理由からグッドビジネスです。

第一に、人口の多様性が巨大化した増大しているため、UDはグッドビジネスとなります。財界指導者C.K. プラハラッド (C.K. Prahalad) が述べているようにピラミッドの底辺に幸運があるとすれば、私に言わせればピラミッドの側面にも幸運があります。どの経済的階級にもある一定の割合で違いをもつ人がおり、また緊急にデザインを必要とする人がいます。この分野はとも巨大で急成長しており経済性あるマーケットです。

第二に、社会が真価を認める場合にのみビジネスが成り立ちます。UDはそのような社会的に認められた真価をもたらします。

第三に雇用の人材です。違いや障害は、革新的に用いられれば強みとなりえます。伝説的なクリケット選手チャンドラセカール (Chandrasekhar) は、ポリオに冒された四肢により“普通の”クリケット選手より優れたレッグスピン選手になりました。

結論として再度申しあげたいことは、UDの目的は人々の多様性に対応した製品を創っていくだけではなく、人間の多様性に対する我々の姿勢を変えることであり、また多様性を統合させ褒め称えることです。

多様性(障害を持つ人や高齢者を含む)というのは他の誰かの問題ではなく、我々自身の問題です。我々は皆、生命のいずれかのステージにおいて、高齢となり、病気となり、制約を体験していきます。我々自身が年とともに異なっていきます。今日の社会におけるもっとも大きな不幸は、“違い”というものの良さを認め、“他者”を受け入れる能力が欠けていることによるものです。

我々は皆これを社会の一部としてとらえ、特にデザインを職業とする人たちの責務として取り組まねばなりません。なぜなら、白色の光を放つ生命は総ての異なった色から成り立っているからです。

本論文は2008年7月18日 Jamasetji Tata Trust が主催し国立デザイン協会で開催されたセミナーでの基調講演の一部です。

特集② : *towards2010*

2009 年度振り返りと国際会議に向けて

～研究開発企画部会 PJ・WG 主査対談～



日 時 : 2010 年 2 月 15 日 (月) 10 : 00 ~ 12 : 00

場 所 : IAUD サロン (東京・トヨタ八丁堀ビル 4 階)

出席者 : 布垣理事 (研究開発企画部会 副部会長)

衣の UD プロジェクト 一色主査

食の UD プロジェクト 古田主査

移動空間プロジェクト 和田主査

余暇の UD プロジェクト 原田主査

メディアの UD プロジェクト 伊賀主査

労働環境プロジェクト 加藤理事

標準化研究ワーキンググループ 宮澤主査

聞き手 : 成川 匡文 (IAUD 理事長 / 情報交流センター所長)

川原 啓嗣 (IAUD 専務理事 / 情報交流センター副所長)

※なお、今回どうしてもご都合がつかなかった住空間プロジェクトにつきましては、対談の後日、個別にコメントをいただきましたので、本稿の最後に掲載させていただきました。

成川 : 本日は月曜の早い時間ですが、調整いただきましてありがとうございます。この企画は昨年度も実施しましたが、前回と少し違うところは、今回は研究開発企画部会副部会長の布垣理事にも部会全体の俯瞰と言う観点でご出席いただきました。また、2010 年度は国際会議という大きなイベントがありますので、①2009 年度のトピックス・振り返り、②国際 UD 会議に向けての計画・意気込み、③IAUD の活動全体に対して普段感じていること、④その他何でもご意見・ご要望など、という 4 つの点についてお聞きしたいと思いますが、基本的にフリー・ディスカッションですので、ご要望ですとか、特に普段感じておられることや、これからこういう風にしたいということなど、気軽にお話ください。それでは最初に、衣の UD プロジェクトからお願いします。

一色 : 2009 年度以前は、プロジェクトの活動コンセプトやテーマについてのディスカッションが長く続き、いろいろベクトルが出てきた中からひとつに絞り切れなかったということがあります。衣の UD について文献など資料はあっても現物を見たこともないし体験もないと

いう状況で、何をやればいいのか分からないというのが実態でした。国際会議では何か具体的なアウトプットを出したいということで、2008年度末ころに2010年度に向けたロードマップを作成しました。まず、2009年度はウェアのサンプル作成に着手し、2010年度は評価の手法も含めて検討し評価結果をまとめ、国際会議で発表するというサイクルで取り組んでいきたいと考えています。



具体的には2ウェイで着脱しやすいジャケットの作成を進めており、大澤部会長からは改善したサンプルを作成して国際会議でファッションショーをしたらという提案までいただいています。が、実質そこまでいくかどうか何ともいえないところで、サンプルをどのようにして作るかということが当面の課題です。

IAUDの活動全体に関しては、弊社（住友スリーエム）にはUDを中心に扱う部署がないということもあり、皆さんの熱心な取り組みに驚いている状況です。弊社は素材メーカーですので、モノづくりという点では推進力になり難いという面があり、今後は服飾メーカーさんなどにもプロジェクトに参加していただけるようにしていきたいのですが、現在のサンプルづくりもそのための足がかりという意味合いがあります。しかし、最初に予定していたところで対応が難しくなり、現在、再度どこで作っていただくかをプロジェクトで検討しているところです。

成川： ジャケットという使い方としては特殊な用途ではないということでしょうか？

一色： そうですね、特殊な方しか着られないというのは受け入れられにくいので、一般の方が着られるものが良いというのがわれわれのコンセプトです。アパレルメーカーに話を持って行ってもUDを前面に出した服は売れないので作りません、何のメリットがあるのというのが正直な反応です。

成川： なるほど、そういう悩みもある訳ですね。ありがとうございました。それでは次に食のUDプロジェクトはいかがですか？

古田： 2009年度の振り返りということですが、実は2008年度の終了時に参加メンバーが会社の都合や、会社に帰って活動成果をうまく報告できないなどの事情で、3社までメンバーが減ってしまって活動が難しい時期もあったのですが、名古屋のUD大会をきっかけにプロジェクトに入ってきてくださったり、メンバーの方が参加者を勧誘したりして、4月の段階で5社、10月には6社まで増えて今に至っています。

4月からスタートしたことは、注意警告マークを共通化していこうということで、昨年末の浜松のプレイヴェントでも発表させていただいた「やけど注意・蒸気注意マーク」を各社がオリジナルでバラバラに作って使うのではなく、共通で使っていただけるよう、実際の案を制作し調査を重ねて最終的な案に絞ったことが、今年度の活動の大きなことだったと思います。先日、理事長と専務理事にも日経新聞の取材を受けていただき、記事として紹介されました。

これらのマークは実際には「やけど注意」、「蒸気注意」などの文字表記と組み合わせて使用されることが多いので、現在、その書体について検討を進めています。最近、UD書体なども出てきていますので、最終的にセットとして組み合わせていきたいと考えています。

食のUDは大きく3つの活動があるのですが、生活者調査というのもその一つで、少し進行が遅いのですが2008年3月末に調査した結果をまとめ、浜松のプレイヴェントではコピーしたものを配布しました。先日、その印刷物があがってきましたので、まずプロジェクトメンバーで共有し、Webサイトに掲載していきたいと



思います。次のテーマはまだ決まっていますが、調査は今後も毎年続けていきたいと考えています。

もう一つは、アレルギー関連の表示について話が一旦止まっていたのですが、メディアのUDプロジェクトで取り組まれているメンバーがいらっしやって、今後、連携して共有していただけるか可能性を検討していきます。

ご覧いただいているのはメンバーのキューピー様から今月発売される新商品で、パッケージ裏面に「やけど注意マーク」を採用していただきました。プロジェクトのメンバーということで先行して使っていただいても良いだろうという判断をしました。舌でつぶせば飲み込めるとか流動性の度合いで食べやすさを4段階に区分しているUDフードの商品と電子レンジ調理商品です。国際会議の時点ではもっと採用例も増えていると思いますのでそれらを含めて、取組みのご報告ができるのではないかと考えています。



成川： ありがとうございます。国際会議を意識すると、海外で例えば「やけど注意マーク」のようなものの状況はどうなのでしょう？

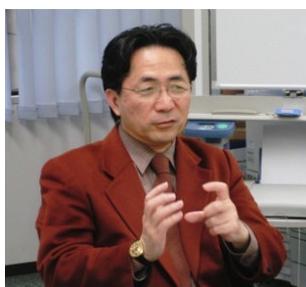
古田： 一度調べてみたことがあるのですが、「やけど注意マーク」のようなものはあまり例がなくて、少なくとも統一して使用されているということはないようです。

川原： 以前、事務機器などで主に使用するピクトグラムを開発する動きがあり、それがISOにも発展したのですが、これは大変良い成果ですので、ぜひ、日本の標準のピクトグラムにするとか、さらにはISOに提案するところまでもっていければいいと思います。先ほど文字表記の話がありましたが英語表記も検討し、10月の国際会議で提案していただければいいですね。

成川： 例えば国際会議に来られた海外の人たちがこれを見ると、どういうふうに思われるのでしょうか？

古田： マークを作るにあたってはのべ500名くらいの方に調査を行ないました。プロジェクトでもご提案した結果について海外の方の意見もぜひ、聞いてみたいという話はあるのですが、具体的なやり方が良く分からなくて、まだ実現していません。

川原： いきなり海外でなくても最初は国内在住の方でもよいのではないのでしょうか。今度、国際会議が開催される浜松市にはブラジルなどから来られた方がたくさん住んでおられるようですので、たとえば行政のご協力などをいただいてもうまくやれば可能性は十分あると思います。ぜひ、具体的に検討してみてください。



私の方にもパッケージのUDに関する記事や講演の依頼が今年になっただけでずい分増えていて、関心はかなり高まってきているという感触はあるのですが、どうなのでしょう？

古田： パッケージのUDについて取組みはかなり早くからあって、特に食品メーカーではある程度あたりまえのことになってきていると思います。マークの共通化に関しては、大手メーカーはもちろんです、マーク作成などどうしたら良いのか分からないというメーカーから広く使っていただけたらと考えています。

成川： 独自で作られている大手のメーカーさんでは意匠権はどうされているのでしょうか？

古田：特に登録されずに公知にしているところが多いと思います。

成川：例えば中小メーカーが同じものを使おうと思えば使える状況ではあるけれど、どこか後ろめたい感じがあって、そういうところが中立的な立場の IAUD の作ったマークなら使いやすいということでしょうか。

川原：同じものを使うと後でクレームがくるといやだから少しだけ変えて使う、その結果として似たようなマークが氾濫し混乱を招いているとすれば、共通したマークを提案し統一していくという役割を IAUD が担うというのは、社会的にも意味のあることだと思いますね。

成川：ありがとうございました。それでは次に、余暇の UD プロジェクトはいかがでしょう。

原田：今年度の活動ですが、昨年度と同様にインドアとアウトドアの2つのテーマで活動してきました。まずインドアでは TVCM 字幕について取り組んできました。いよいよ来年アナログ放送が終了し地上デジタル放送に移行しますが、ハイビジョン化が進むなかで番組の字幕対応に対して CM については現時点では残念ながら実情はあまり進んでいません。

しかし、インターネットの世界では新たな動きがあって、昨年暮れ、浜松のプレイヴェントの前日に開催した、メディアの字幕づけ研究の第一人者であるラリー・ゴールドバーグさんの講演会（詳しくは本誌1月号をご覧ください。）でも紹介されていましたが、ただ単に情報保障としての字幕ではなくて、新たなビジネスチャンスを生むしかけとして字幕が認知され注目を集めています。たとえばグーグルが YouTube の映像に字幕を自動的に付加するという試みをはじめました。日本の企業でもパナソニックさんがシェーバーの CM を YouTube で流されていますが、そこには字幕がつけられています。また、リコーさんが企業サイトのなかで字幕をつけた CM を流されています。

しかし世界的にみると、インターネット上の情報保障は規制がないこともあり遅れているので、来年度はまず IAUD 会員の企業サイトでの対応をお願いし、日本からの動きとして展開し、国際会議でも紹介できればと考えています。

アウトドアではこれまで旅の UD に取り組んできましたが、今後はそのなかでも交流会・懇親会に焦点を絞って研究していこうとしています。例えば立食パーティなどで、車いすの方にとって、高さの違いで立って話している人のツバキが手元の食べ物にかかるのが気になるとか、聴覚障害の方が口話のために口元を見るので、食べ物をクチャクチャしているところが見えて気持ち悪いなど、そもそも聴覚障害の方はそういった場に参加しづらいにもかかわらず、あまり注目されていないところがあります。もっと広く考えれば喫煙やお酒を飲めない人の問題などもあり、具体的な成果物をどうするかはこれからの検討になりますが、まだあまり手のつけられていない UD のテーマとして、国際会議では何らかの具体的な提案ができればと考えています。

IAUD の活動全体に対しては、たびたびプロジェクトでも話に出るのですが、以前に比べて会員が誰でも参加できるセミナーなどプロジェクトを横断した活動が年間を通して減っているという声を聞きます。会員メリットを感じられるような、プロジェクトに横串を通した活動にも力をいれたいと思います。



古田：今の話にも関連するのですが、昨年末の浜松市でのプレイヴェントについても、他のプロジェクトの発表を聞きたい気持ちはあっても、静岡県ということで出張費の問題などもあり、参加しづらく情報共有が難しくなっているということを感じますね。

成川： おっしゃっていることはよく分かります。プロジェクト間での情報交換が少ないというのは、IAUDの会員としてのメリットを考えれば、重要な問題です。研究開発企画部会としても、各プロジェクトの皆さんにも横断的な活動を一緒に考えていただきたいと思います。

CM字幕については大澤部会長も非常に熱心で、会員企業にも何らかの形で協力を呼びかけていくことが必要ではないかと話をしています。インターネットを最初の切り口にすることも大澤さんから伺っていますので、今後、具体的に検討して、ぜひやっていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

川原： インターネットでのパナソニックさんの事例など、良い事例をIAUDのサイトなども活用して積極的に会員の皆さんに紹介して、うまく盛り上げていきたいですね。

成川： 国際会議でも海外の事例なども含めて成果を紹介できればいいですね。また、交流会というテーマも、研究の対象としてだけでなく、IAUD全体の活動として捉える必要がありますね。

布垣： その方が会員のメリットも大きいので、そのへんは私も大澤部会長と、ぜひやりたいという話をしています。セミナーや交流会という場もあるでしょうし、例えば住空間プロジェクトの「UDプラス」など他のプロジェクトでも関連の深い横串のテーマをきっかけに連携して、情報交換していくというやり方もあります。



しかし、一方で不況の影響で出張費が抑えられてメンバーが参加しにくいという状況もあり、また2010年度は国際会議に向けた活動に重点をおきたいということもありますので、バランスをとりながら、そのような横串の活動を考えていきたいと思っています。

成川： そうですね、ぜひよろしくお願いいたします。それでは続いて移動空間プロジェクトはいかがですか？

和田： 今年度は静岡県、静岡市と一緒にいった静岡駅周辺の公共交通のシームレス化提案に向けた調査を中心に組み立ててきましたが、調査のフェーズはほぼ終了したので、その結果をもとに現地の方とディスカッションする場を今年度中に設けたいと考えています。国際会議では具体的な改善提案を予定していますので、これまでどちらかというと左脳中心のワークだったのですが、それに加えて右脳をしっかりと使って進めていきたいと思っています。

もう一つはこれらの調査手法と調査票などのツールをIAUDの公開Webサイトで紹介する準備を進めており、年度内には掲載する予定です。実際にやってみると思ったより大変で、説明をどうすれば分かりやすくできるかなども大変良い勉強になっていますが、標準化研究WGの事例を参考にしたり、情報交流センターに協力していただきながら進めています。国際会議では公開内容に対する反応や意見も含めてご報告したいと考えています。

活動全体に対して感じていることは、メンバーは他のプロジェクトと比較して多い方だとは思いますがやはり人は減っていて、活動を続けるのが厳しいなと感じています。また、大体2、3年で人が入れ替わっているのですが、プロジェクト活動はどうしても人ありきなもので、テーマが引き継がれずにその時点で活動がゼロキャンセルしてしまうという状況があります。貴重な時間を割いて集まっていたので、何をテーマにするかの議論にあまり時間を費やすのはもったいないなと感じています。メンバーは社会的に貢献できる活動であれば会社の業務に直結した内容でなくても評価してくれるという理解のある会社ばかりではないですし、やはり何か会社に持って帰れる成果が必要な人もいれば、まず人的交流や情報交流だと考えている人などさまざまなので、年度ご



とにメンバー共通のテーマを検討することに多くの時間を費やすより、ある期間はプロジェクトで継続したテーマを設定しておくという考え方もあるのではないのでしょうか。

また、途中から参加したメンバーと他のメンバーが意識を合わせるためにかなりの時間を要するという問題や、活動内容をよく理解できないまま迷いながら入ってくるということもあるので、例えば、最初の1年は会費とらなくてもいいので、事前のUD勉強会のようなものや他のプロジェクトを含め事前に体験できるような、野球でいうとファームのようなしくみが長い目でみると必要なのではないかと感じています。

成川： 最後の話は、そういう問題意識があるということは分かりましたが、会社がどういう活動を評価してくれるかというのは、それぞれ異なるでしょうし、なかなか難しい重い問題ですね。今後の課題として認識しておきたいと思います。ありがとうございました。

それでは次に労働環境プロジェクトの加藤理事をお願いします。

加藤： 今年のテーマがセキュリティとUDということで「個人認証のUD」に絞って活動に取り組んできました。これまでは、課題を抽出し分析したというところまで発表しましたが、国際会議ではその解決案の提示まで進めていこうということで検討をしています。

メンバーが家具メーカーと事務機メーカーの二つに大きく分かれていて、その共通項ということでこのようなテーマで活動しています。参加率はかなり高いのですが、テーマの面白さという点では、何となく盛り上がりがないところがあるので、今期は、誰でも気持ちよく働ける理想の未来オフィスという大きなビジョンに向けて、議論ばかりでなく実際のいろいろなオフィスを見ようということで、見学会など少し楽しみながら情報共有する方向にシフトしていきたいと考えています。議論や分析作業ばかりだとフラストレーションもたまってくるので、メディアのUDの皆さんと共同の懇親会などもしていますが、真面目にまとめるところと幅を広げていくところをバランス良く進めて、活動が縮小していかないようにしていきたいと思っています。



成川： 労働環境PJの活動テーマとして会議のUDというのもありましたが、個人認証以外に考えられていることはありますか？

加藤： いろいろ議論していくと、仕事をするなかでいろんな人とのコミュニケーションがどうとれていくかというところが大きな課題の一つで、活動もできたらその方向へシフトしていきたいのですが、仕事でのコミュニケーションは会ってあいさつして終わりではなく、さらに深いところになっていくので、非常に広範囲な内容を含んでおり、その整理や作業量を考えると今一步踏み込めていないところです。

川原： コミュニケーションという観点では、当事者の方が入ってくると全然知らなかった情報が得られたりします。すでに会議のUDとしてまとめられていますが、単に関係の業種の方だけというだけでなく、ダイヴァーシティという視点でもガイドライン化していくようなことが重要ではないのでしょうか。

成川： これは労働環境PJだけの問題ではないので、研究開発企画部会として、あるいはIAUD全体として共通の課題として考えていく必要もありそうですね。

国際会議に向けては個人認証のUDについてまとめていただくとして、楽しくやりたいという部分も良いですが、皆さん自身のコミュニケーションを良くしながら課題を発見していく仕組みにしていっていただければと思います。ただ飲み歩かなくてね(笑)。

お話ですとメンバーは家具メーカーと事務機メーカーが多いということでしたが・・・。

加藤：そうですね、できるだけメンバーの業種を広げてはいきたいのですが、労働環境と謳ってしまうと関係しているメーカーさんしか集まってこないという感じはありますね。

成川：以前に会員勧誘に伺った会社で、建設資材のレンタルをされている会社があって、工事現場で資材の組み立てなど、多少、体が不自由でも誰でも働きやすい機材やしくみを開発したいという話をされていました。面白い観点だなと思ってお聞きしていたのですが、労働環境といってもオフィスだけでなく工事現場などいろいろあると思います。また、それらに関連してユニフォームや作業服が衣のUDに、標識などの課題がメディアのUDにつながるなど横の有機的な広がりもでてきますね。言葉で言うのは簡単で、実際はいろいろ難しいとは思いますが。

加藤：異業種の方がメンバーに入ってくるとテーマも広がりが出てくるので、ニワトリと卵の関係ですけど、業種を考えると労働環境も工事現場や工場の他にも農業、漁業などどんどん広がっていくので、異業種のメンバーが増えるのは大歓迎です。

布垣：しかし、異業種のメンバーが多いプロジェクトは逆の問題も抱えていて、テーマが絞りきれないとか異なる業種のテーマをどう扱うかという悩みがあります。吸収するところは吸収して、業種が違ってても普遍的な新しい情報が刺激になって、結果的には仕事の役にもたつかもしいないですし、バランスの問題だと思いますね。

原田：労働環境に関連し共通のテーマということで、最近テレワークということもできましたね。弊社の特例子会社でも進めているのですが、全国にいる重度の障害を抱えている方の移動が難しいということでネットワークを介してテレワーキングしています。NHKの番組でもチャットソフトを使って24時間コミュニケーションしているという例が紹介されていました。ダイヴァーシティという意味でも重要なテーマの一つだと思います。

成川：それは体が不自由で移動できないというだけでなく、費用削減で出張できないというケースなどユニヴァーサルという意味で非常に範囲の広い良いテーマだとは思いますが、偏った業種でテーマを見つけたり、皆で集まって共通のテーマを考えるだけではあまりうまくいかなくて、テーマを先に決めて、そこに人が集まるというのでもいいかもしれませんね。

布垣：とにかくいいテーマが見つければやりがいも出てきて、盛り上がっていくのですが、それを見つけるまでが大変なんだと思います。テーマ自体が楽しいというより結果がついてくれば楽しくなってくるということでしょうね。

成川：労働環境に限った話ではないですね。このあたりは少し悩みながら考えていくしかないと思います。白熱してきましたが、そろそろ次にいきたいと思います。メディアのUDの伊賀さんお願いします。

伊賀：メディアのUDプロジェクトは2008年にできたのですが、情報伝達メディアを考えた時、視覚、聴覚、そして視覚のなかには視力や色覚、認識などいろんな問題があるのですが、初年度はメディアに関連のある印刷会社、デザイン会社、NTTデータさんや全日本印刷工業組合連合会の方々などにメンバーにはいっていただき、色覚を中心テーマにして活動してきました。2009年度も引き続いて同じテーマでやっているのですが、気づきがなければどうしようもないということで、私の所属しているカラーユニバーサルデザイン機構(CUDO)で人の多様な色覚に関する問題点や、当事者である色弱者の方に集まっていたいてお話を聞いたりして、気づいたハザードをメンバー皆で集めてきました。

昨年の浜松でのプレイヴェントではまだその段階だったのですが、色弱者側からの声というのはCUDOなどでもツールを作ったりしているので、逆にデザイナーなどの送り手側・



作り手側に提案ができないかということで、現在、いわゆるイメージ配色のなかで色弱者と共有できる資料をつくり、色彩教育などで使っていただけないかと考えています。例えば「ナチュラルな配色」といったときにグラフなどに使うと見分けにくい配色も含まれている訳で、その中で使える配色はこういうものだと分かる資料をつくることを活動テーマに動きはじめたところです。

そういうことで当面は色覚に関することを中心にやっているのですが、たとえば余暇のUDのCM字幕も広義に考えればメディアの話ですし、逆に色覚はメディアだけでなく他のほとんどのプロジェクトに関わっているテーマだと思います。少し訂正しておきますが、先ほどの労働環境PJとは楽しい飲み会だけやったんじゃないなくて、施設見学会を一緒に参加させていただき、ちゃんとお勉強した後でちょっとだけ（笑）ということですので、そちらがメインではありませんので加藤理事を責めないであげてください。

カラーUDの活動というのは他のUDの動きと比べると30年くらい遅れていると感じていて、日本では特にここ2、3年でピックアップされてきたものですが、実は日本が出発点になっていることが多いんです。海外ではどうなのかとよく聞かれますが、色覚の問題は海外でも同じで、むしろ北欧などでは割合としては倍くらい多いので、色だけに頼らない取組みがいろいろされていますが、日本のように特別な活動にはなっていないようです。

国際会議という場はそういう意味で日本からスタートした新しいデザイン活動を世界にアピールできるすごく良い機会だと思っています。これまでやってきた成果を発表するだけでなく、できたら展示ブースも設けて世界へのアピールと情報交換ができないかなと考えているところです。

成川： 国際会議で展示ブースをとということですが、ちょうど今、国際会議のプログラムの検討をしていますので、さっきのファッションショーもそうですが、ぜひ部会として盛り込みたいことがあれば、どんどん早めに提案をしていただければと思います。

川原： お話のなかで日本のカラーUDの活動は30年遅れているということですが、研究はヨーロッパに比べて進んでいるのでしょうか？色覚障害者が北欧では男性の10%、日本（黄色人種）では5%という違いは理解しているのですが。

伊賀： 日本では色覚検査を全員に対して何十年も実施してきたため、色弱者が色覚に対して話すことを怖がるというベースができてしまい、この色は見分けにくいと言うと何か言われるんじゃないかと黙ってしまい、問題化しなかったという背景があるのですが、ここにきて問題が多発して研究が進んだということだと思います。海外の先進国で色覚検査を実施している国はありませんし、例えば北欧では白夜という環境で誰でも見分けにくいから対応するのが当たり前というところもあったでしょう。日本で多く生産されている多色LEDで、なぜ色だけ変化させるのかと指摘されるなど、いろいろな問題がでてきて、現在、日本の研究が一番進んでいると思います。

川原： 現在はメディアのUDのメンバーは印刷会社さんが一番多いのでしょうか？

伊賀： 一番多いのはデザイン会社でしょうか。プロダクトデザインをやっておられるメーカーの方にはあまり声をかけてこなかったのですが、ゲーム機メーカーなど新しく入られる会社もあり、この分野については皆さん非常に注目されていて、メンバーは増える傾向にありますね。

成川： ありがとうございます。それでは最後になりますが標準化研究WG、お願いいたします。

宮澤： 私、岩片の後任として先月から標準化研究 WG の主査を引き継ぎ、今まさに勉強中というところです。現在の活動ですが、3年ほど前から UD マトリックスというかたちで多様なユーザーに対してどういう観点が必要かということをもとめる作業を中心に取り組んできました。昨年度のエクセルシート版に続いて今年度は Web 版を会員に向けて公開しましたが、その情報をベースとして現場で手元において活用していただける冊子版を、出版事業委員会やメディアの UD プロジェクトにもご協力いただき「IAUD UD マトリックス ユーザー情報集・事例集」として出版し、販売を開始したところです。



国際会議に向けては、これらの内容を海外に向けてどう展開していくかを検討しています。現在、海外の状況の調査に着手しています。まずは Web 版の強化、英文化に向けた作業検討を進めていきたいと考えています。また、国際会議終了後の話になるとは思いますが、UD の標準化という観点でどういう活動のシナリオが考えられるかということも WG で併行して検討していきたいとメンバーと話しています。

IAUD の活動ということについては、昨今の不況の影響で出張がきびしいということで、参加メンバーが固定化し減ってきている状況があります。難しい問題だと思いますが活動内容自体を活性化していく必要があると感じています。先ほどから話に出ていますように、積極的にいろんなところに出かけて行くとか、コミュニケーションの場を設けるといふこともあるでしょうし、皆さんの知恵もお借りして活性化していきたいと思えます。

最後に国際対応ということでは UD マトリックスの英文化ということもやっていくのですが、標準化検討 WG だけで対応できる訳ではないので、ぜひ、IAUD サイト全体のグローバル化の一環として考えていただきたいと思えます。

川原： UD マトリックスの英文化は、ぜひやっていただきたいと思えます。ただ、この内容を海外に向けて紹介する場合、日本が ISO に向けてアクセシビリティの問題などで主導的に動いて提案した「ガイド 71」などの規格と考え合わせ、例えばヨーロッパなどの反応は、良い事例を紹介してくれてありがたいということなのか、もうこの程度はすでにやってるよということなのか、どのようなことが予想されるのでしょうか？

宮澤： 海外で紹介するときには興味をもっただけそうなところに絞っていく必要があると思えます。言葉は違え HCD などそれぞれの国での考え方なり取り組まれている事例がありますので、日本ではこんなすごいことをやっているよという日本らしい事例を選んで、積極的に紹介していきたいと思えます。

川原： まずは Web 版を英文化したいということでしょうか？

宮澤： Web 版にアクセスする方はまず IAUD のサイトにアクセスされますので、UD マトリックスをどうするという前に、サイト全体の英文化をどうするかという中で、考えていただきたいなと思っているのですが、その点はいかがでしょう？今この場で回答というのは難しいとは思いますが。



成川： 基本的に国際ユニバーサルデザイン協議会と名乗っている以上は、英文化とか海外対応というのは考えていかなければいけないのですが、IAUD が発足したときの話として私がお聞きしているのは、まずは日本の UD 活動をグローバルに発信していくという意味での国際であるということでした。しかし、いずれにしても IAUD のグローバルサイトの充実には海外の方からのご指摘もありますし、やっていかなければいけないことなので、予算やパワーの問題などいろいろ

いろいろ制約もありますが、情報交流センターの重点課題として少しずつ対応していきたいと思っています。皆さんにもそういうことを念頭において活動していただくとありがたいと思います。

標準化研究 WG として UD マトリックスの次に考えている計画などはありますか？

宮澤： 新しい観点として海外の話はどう展開・充実させていくかということが一つあるのと、超高齢社会というなかで会員の皆さんのニーズも変わってきますので、改めて高齢者の研究という二つのテーマを今後、検討していきたいと考えています。

成川： ありがとうございます、ひとあたり皆さんからお聞きしましたが、Newsletter はまず会員の皆さんがお読みになりますので、会員に伝えたいことや全体を通じて感じたことなどありましたら何でもお願いします。

布垣： 研究開発企画部会として今お聞きしたような課題やリクエストがあるにしても、成果もどんどん外に出していきたいということと、一方で会員のメリットもうまくバランスさせていきたいという方針でやってきて、皆さんもご苦勞されてテーマをいろいろ工夫されてきたんだと思いますが、ポジティブに見ますとそういった成果が少しずつ出始めたと感じています。たとえばやけど注意マークが外向けにも紹介されたり、静岡市との連携や CM 字幕の話など外向きの働きかけがされるなど、担当されている方はご苦勞されているとは思いますが、岡本議長からも少しずつ成果がでてきましたねという言葉もいただき、私も芽が出てきたのかなと思っています。昨年の浜松市でのプレイヴェントでもコミットしていますので、国際会議ではまとめとして報告できるレベルまでもっていきたいですし、それが来年度の最大の課題だと思っています。

今日、皆さんからいろいろでました意見も、例えば横串の情報交換や交流会など、やろうと思えばすぐにできるものもあるので実現したいと思いますし、今までのプロジェクトに縛られないやり方を具体的に考えていきたいと思っています。話にもでていましたが、プロジェクト間で重なっているテーマもありますし、個別のプロジェクトでやった方がいいのか、連携の方が広がっていくのかなど、ただの交流会でなく実質的な活動に生かせる横のつながりをつくっていかれたらと感じています。



私の個人的な夢と希望ということになりますが、できれば研究開発企画部会発で新しい UD の動きや考え方を発信できるところまでいければ、もっと大きな意味で社会や企業のために貢献できると思います。今日は参加されていませんが、住空間 PJ の「UD プラス」という考え方など、ネガティブをゼロにするだけでなく前向きに楽しめる UD ということは他のプロジェクトでも皆さんやりたいとおっしゃっていますので、具体的な形にしていければ IAUD 発の新しい UD のトレンドのようなものもつくっていけるとと思いますし、そこまでいければ大きな成果になるだろうというのが今後についての抱負というところです。

成川： ありがとうございます。確かに私もそうなっていけば良いと思います。その他にはいかがでしょうか？

原田： 部会の活動に生活者の参加がもっとあると良いなと思います。余暇の UD にも聴覚障害の方が 4 名、車いすの方も参加されていますが、毎月、大変生々しい有意義なディスカッションができています。

成川： IAUD のビジョンにも関連する話ですが、おっしゃるとおり社会的基盤、UD 製品・サービス、生活者という 3 つの柱が研究開発企画部会の活動にも絡んでいると一番いいのかなということだと思います。

川原： 当事者の方が加わるとミーティングの質が上がると思いますし、夕方以降や休日など賛助会員など個人の方でも参加しやすい日程やしくみを考えなければいけないですね。

和田： 情報発信についてはプロジェクトのなかではメンバーも理事の方も一生懸命がんばっていただいているのですが、広報の体制というのが形としてあってもいいと思います。Web サイトに掲載しただけでは一般の方はあまり見ないと思いますし、新聞・雑誌などのメディアにも発信していくことが必要で、そのネタもそろってきているのではと思っています。パワー的にも大変で正直なところ部会だけでは難しいので、これはお願いになりますけれど、IAUD のなかでも情報発信をメインにやっていただけたところが欲しいですね。

川原： 確かにこちらからメディアに働きかけることも大切ですが、メディアもまずはそのようなネタがないと動きませんので、そういう意味ではやけど注意マークの例など、Web に掲載したことで取材があり記事になるというサイクルがやっとできてきたのではないかと考えています。

布垣： このタイミングでまさにこれからやっていかなくてはいけないのですが、ともするとこれまで情報発信まで研究開発企画部会のメンバーが背負っていた部分があるので、IAUD 全体として広報活動がつながっていけば、各プロジェクトはもっと成果物に集中できるのではないのでしょうか。

古田： 食のUD でもやけど注意マークについて「包装技術」というパッケージ関係の業界誌に投稿したのですが、紙媒体への投げかけもプロジェクトからでなく IAUD としてもっとやっていただきたいと思います。また、Web 調査もかなり大規模な調査をやっていますので、その結果を新聞や雑誌の記事などで「IAUD 調べ」といった出典として、もっと広く活用していただけたらと思います。媒体への紹介などをプロジェクトだけに任せるのではなく、IAUD 全体としてもっと積極的にやっていただきたいという意見がプロジェクトでも出ていました。



川原： ちょうど今、来年度の事業計画をやっていますので、そこに反映して組織も改変していくことを考えていく必要もありますね。

成川： 皆さんがいろいろ感じておられることもよく分かりました。IAUD がどういう団体になっていくかということと大きく関わっていると思いますが、いろいろと成果もできましたので、これをどう生かしていくかとか、IAUD が世の中のためにどう役立っているのかという認知を高めることなど、体制も含めて考えていかなければいけないですね。

布垣： そうすると外からも IAUD に対する要望がでてくるでしょうね。やけど注意マークだけでなくこういうこともやって欲しいとかね。

古田： 自分たちだけ少人数で考えていると行き詰ってしまうので、外からこういうこともできるのではというアドバイスをいただける機会もあるといいですね。国内で実施した Web 調査のフォーマットなどもあるのでルートさえあれば海外の調査もやりたいのですが、例えば海外ネットワークの団体との連携などもできないのでしょうか？

川原： IAUD もそういうルートはたくさん持っているのですが、やりたいことがはっきりしているの

であれば、来年度の事業計画のなかに盛り込んでいただいて、予算が必要であれば予算化していただければいいと思います。

布垣： さっきから話にでていた横の交流というのもあまり受け身で考えずに、もっと前向きに考えていただければ実現できることだと思います。実際の現場の課題だとかプロジェクトの抱えている問題を一番ご存じなのはここにいる主査の皆さんなので、定期的にやっている部会でも、情報共有で聞いた内容などをきっかけに自ら発案して欲しいですね。そういうきっかけがないとこちらもなかなか働きかけにくいですし、部会でも時間を設けて検討できると思いますので、そういう動きをどんどんやっていただきたいですね。

原田： メーリングリストも事務連絡だけに使うのはもったいないですね、もっとそういった提案や意見交換にも活用できると思いますね。

成川： 皆さんが感じておられることなど、よく分かりました。話は尽きませんが、そろそろ予定していた時間も過ぎましたので、本日は、よろしければこのへんにしたいと思います。ぜひ、国際会議に向けては皆さんおっしゃったことを一生懸命やっただくことと、国際会議の後も2010年度は半年ほど残っていますので、その間のことも先ほどから話にでていたような有機的な活動ができるよう、テーマややり方を考えていただければと思いますのでよろしくお願いします。



本日は長時間にわたりいろいろとありがとうございました。

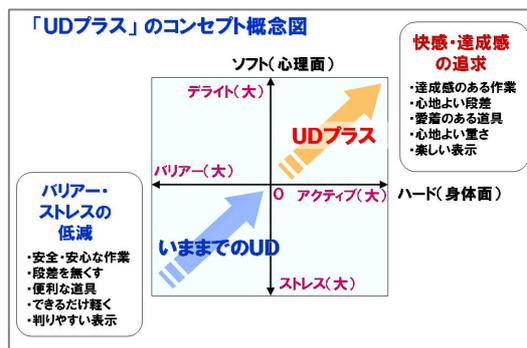
以下は住空間プロジェクトから後日、個別にいただいたコメントです。

①2009年度を振り返って感じること、トピックスなど

今年度も引き続き「UDプラス」をテーマに、2ヶ月に1度のペースで事例を視察してきました。特に、山口県の山奥にあるデイサービス施設「夢のみずうみ村」で、思わず歩いてみたくなる切れ折のスロープや自主性や活気を促す様々な仕掛けによって生き生きと元気になっていくお年寄りの姿に直面したこと、また、地域社会との接点を学校の中に持った「志木小学校」で積極的で活発にコミュニケーションを図り、社会活動に励む、しかもユニバーサルデザインへの非常に高い子供たちに出会ったことなどが非常に印象に残っています。

住宅では、島根県の「階段の家」やつくばの「移ろ居コンセプトハウス」など、人の生活を豊かにさせる様々な居場所や行為を誘引する工夫が見られました。

これらの事例を通して、ますます人を元気にさせる「UDプラス」は確かにあると確信できた気がします。



②2010年度または国際UD会議に向けての計画、意気込みなど

私たち住空間プロジェクトでは、これまでの先端事例の視察や、ユーザーとのワークショップなどの活動を通じて「UDプラス」とよぶ、新たなUDコンセプトの研究に取り組んでいます。国際UD会議に向けて現在、早稲田大学理工学術院の渡辺仁史研究室との共同研究を進めている「デザインによる環境や機会の提供がユーザーのモチベーションを高め、「鍛えられる」「楽しい」といった効用をもたらす」という仮説の検証結果について発表し、使うことで「鍛えられる」「楽しい」というUDの新たな視点を世界に向けて発信したいと考えています。

③IAUD の活動全体に対して普段感じていること

住空間PJでは実際住まわれている家や、デイセンター、病院、学校など数多くの建物を見学、またそこに住まわれている方々や、運営者、利用者の皆様とのワークショップ等をとって、それらにおけるすべての空間、道具はその利用者自身の為に存在すること、またすべての利用者にはそれを選択する権利があること等が確認されました。

私ども IAUD は多くの民間企業が自ら運営する団体であると同時にもの、場、情報などを生産、建設、提供している企業の集合体でもあります。それらの企業の行う技術開発や技術改新はその利用者の立場に立ったものでなければなりません。その対象者は世界に存在するすべての方々であります。そのような事をふまえて住空間PJでは利用者の多くの意見をもとにUDにおける新たな考え方の提言を行って行こうと思います。この様な活動をどうして会員間の情報共有や社会への情報発信をすることにより、より快適な社会づくりに貢献したいと思っています。

以上

ヤマハ株式会社 ユニバーサルデザイン 「ヤマハにできること」～2010 年国際 UD 会議に向けて

ヤマハデザイン研究所
峯 郁郎 / 御影 幸宣

■はじめに

オルガン、ピアノの製造から始まったヤマハは、120年の歴史を重ね、世界的にも類を見ない総合楽器メーカーに成長して参りました。

楽器製造のみならず、世界にネットワークを広げる音楽教室の活動は、文字どおり「モノ」と「コト」の両輪で文化貢献し、すべての人々の心豊かな生活に貢献し続けております。

また、弊社のある浜松を含む中部圏は熱い情熱でもの創りに取組む企業や団体が多く、人とモノとの豊かな関係が育まれて来た地域と言えます。

過去2回の IAUD 国際会議は、大勢の人々が集中して暮らし、さまざまな問題が顕在化し易い首都圏で初回を、更には文化と歴史に恵まれた国際都市で二回目が行なわれ、そして今回は日本のモノづくり基盤とも言える中部圏で開催されることになり、より一層の深みと問題への強い想いが議論されることと思います。

我々ヤマハは前にも述べましたように、総合楽器メーカーだからこそその多角的な視点を持ち、音楽という「世界共通語」のための楽器という道具を扱い、人々の心の表現、魂の叫びをすべての感性に響かせることを目指しています。

2009年のしずおかユニバーサルデザインの絆 in Hamamatsuにおいて、「ヤマハにできること」と題した展示を行いました。これを主導したヤマハデザイン研究所は、30名に満たないメンバーに5名の外国人デザイナーを含む多国籍組織で活動しており、音楽の、楽器の、更にインターフェースの理想の為に厳しく議論する為の理念を共有し、日々クリエイティビティを鍛えています。

■デザインフィロソフィー

1987年(弊社100周年)から、1人1アイテムを担当する事が基本のデザイナー同士が同じ目的と理念を共有できるように、5つのデザインキーワードが制定されました。

Integrity : 本質を押さえたデザイン

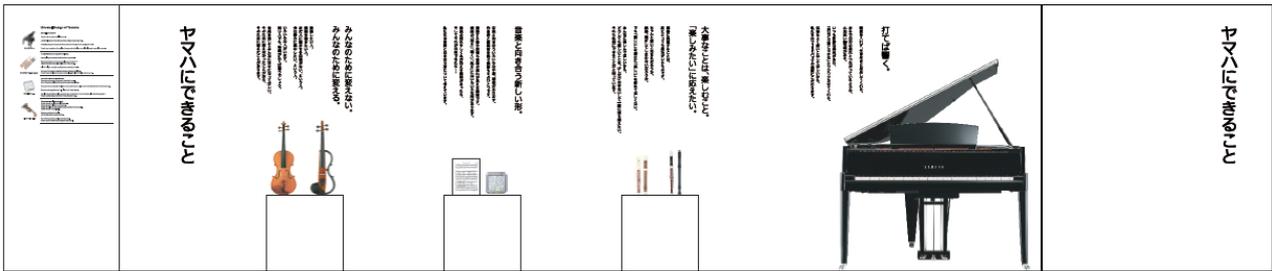
Innovation : 革新的なデザイン

Aesthetic : 美しいデザイン

Unobtrusive : じゃばらないデザイン

Social Responsibility : 社会的責任を果たすデザイン

これらはプロダクトデザインに関して述べている事ですが、ショールームや展示に関しても同じコンセプトや想いを込めています。



ヤマハにできること

打てば響く。

鍵盤を入れず、生まなきで反応してくれる。
まるで自分の指先とつながっているような心地よい一体感がある。
いつも新鮮な発見があり、「次はこう弾くのかな」とワクワクさせてくれる。気持ちよく使いこなしてほしいから、私たちはフードハットの設置にこだわります。

大事なことは、楽しむこと。「楽しみたい」に応えたい。

楽器に挑戦することは、誰にすることも勇気がいるものです。ちゃんと使いこなせるだろうか。結局挫折してしまわないだろうか。でも「楽しい」を理由に「楽しい」を諦めてほしくない。みんなに楽しんでほしいから、どうしても難しいことを、少しでも手伝いして一緒に乗り越えたい。それも私達にできることを考えています。

音楽と向き合う新しい形。

音楽と向き合ういろいろな手段、場面があります。作曲家と演奏者を繋ぐ楽譜もそのひとつです。演奏する姿や表情も音楽の流れる見える瞬間です。音楽の「見る」「聴く」「触る」にはいろいろな形があります。音楽の流れやしくみが見える楽譜があったら、そしてそれが共有できたら... 私たちは音楽と向き合う形について考えています。

みんなのために変えない。みんなのために変える。

演奏したい人。演奏を聴きたい人。まだ人に聴かせられる自信がないという人。今は静かに集中したい、という人。いろいろな人がいます。同じ人でも、時間がたてば違ってくるでしょう。音楽を通してみんなに幸せになってほしい。そのために変えなかつたことがあり、そのために変えたことがあります。

今回の展示では、「ヤマハにできること」の想いを4つのキーセンテンスで表現し商品と共に掲示いたしました。



オリジナルの楽器とヤマハがデザインした楽器を同じ台の上に並べ、手にとって見比べられるように配置しました。

小さなお子さんや車椅子からでも手にとってもらえるよう、展示台の高さに配慮しました。

読みやすさに配慮した書体と表示を心がけました。

英語併記を行いました。

開催日初日、弊社社長も視察に訪れました。(右から二人目)

企業展示の内容を補足するために、各商品の概要を綴ったリーフレットを配布いたしました。



AvantGrand N3

打てば響く。

グランドピアノならではのリアルタイムで自然なフィードバックの再現にこだわった新しいコンセプトのピアノです。

ただ弾けるだけではなく、弾き込めるピアノであるために、専用グランドピアノアクションと木製鍵盤を採用しました。

ハンマーが弦を叩いた時の感覚をリアルに再現しながら、打鍵の強弱やタイミングなどを複数のセンサーできめ細かく感知し、繊細な演奏表現を実現します。

ピアノの響き、特に低音域は、演奏者が直接身体で感じ取っている大切な要素。

アバングランドはこの自然な響きを再現し、演奏者に伝えます。



片手リコーダー
YRS-900L / YRA-900L

大事なことは、楽しむこと。

「楽しみたい」に応えたい。

木管楽器に用いられているキーシステムを応用し、片手で演奏できるリコーダーです。

1979年東京都補装具研究所より手に障害のある児童でも演奏できるリコーダーの開発要請により製作が始まりました。

ソプラノとアルト、もちろんそれぞれに右手用と左手用があります。(写真は左手用)

ものづくりデザイン静岡2001 ユニバーサルデザイン静岡大賞(知事賞)受賞



TENORI-ON TNR-W

音楽と向き合う新しい形。

表裏それぞれ256個のLEDで音楽の構造を視覚化し、それらに直接触れることで直感的な演奏を可能にした全く新しい楽器です。

テノリオンはメディアアーティスト岩井俊雄氏とヤマハとのコラボレーションにより生み出されました。

光で表現された音楽の構造を目で見ながら直接触ることで、専門的な知識がなくても音と戯れるかのように作曲や演奏が可能です。

本体裏側にも同じLEDが光り、聴衆側からも演奏状態を見て楽しむことができます。



Silent Violin SV-100

みんなのために変えない。

みんなのために変える。

伝統的な演奏方法は全く変えずに、共鳴するボディを極限まで削ぎ落として消音化を実現したバイオリンです。

バイオリンは正確な音程を出すのが難しく、音量も大きいため、その人気の高さにも関わらずはじめるのが難しい楽器でした。

サイレントバイオリンはバイオリンの演奏感そのままに、初心者でも比較的簡単にきれいな音色で演奏のできるエレクトリック(電気)バイオリンで、消音機能を活かして人がささやく程度の音量で、周囲に気兼ねせずに演奏を楽しむことができます。

■プレイベントをふりかえって

ヤマハブランドの存在感と可能性をアピール出来たが・・・

楽器の持つ存在感と偉大さ、キャッチーなところを改めて実感しました。この様な場で存在自体が人々の注目を集めるのは、楽器ならではの特徴でしょうか。

リーフレットは250部刷りましたが、100部ほどの残りが生じました。その事から、金/土の2日間の開催で悪天候にも関わらず150名ほどのお客さまに来て頂けたと考えています。ただ、思ったより来場者が伸びず、事前の告知方法等メディアの活用も含め、いかに動員数を増やしUDに関しての興味と問題意識を持って頂くかも、今後に向けての課題であると実感しました。

一方、楽器ならではの説明の難しさも・・・

その楽器をどう使うのか、どう弾くのかといった前提の説明に時間を取られ、本題のUDに関しての会話に時間をかけられない、たどり着けない事が多々あったのは非常に残念でした。普段から楽器に慣れ親しんでいる我々とは違い、一般のお客さまにとって楽器とは渡されたら逃げだすような、取り扱いが難しく縁遠いものなのだと改めて感じました。

片手リコーダーは比較的理解してもらいやすい例でしたが、AvantGrandは「どこがUD?」と思われたお客さまが多かった様です。TENORI-ONに至ってはそもそもこれが何なのか、といった問いかけに答えねばなりませんでした。実は壁面の文章が「タネ明かし」になっている訳ですが、お客さまによってはそれを読んで頂いても理解してもらえなかったのかもしれませんが。

しかしながらこのような課題を浮き彫りに出来たことは、改めて自社製品を見つめ直す良い機会だったとも受け取れ、大変有意義な経験であったと言えます。

■2010 IAUD 国際会議に向けて

地元で開催される国際大会において誘致にも積極的に参加した弊社にとっては、大会が盛り上がり、各国からのお客さまからどのような反応が頂けるのかとても楽しみです。

その一方で、今回のイベントを通して、社内の各部門でそれぞれUDに取り組んではいるものの、考え方にばらつきがあることは否めないという現状が分かりました。

これらを踏まえ「ヤマハならではのUD」をまとめ、弊社の姿勢を打ち出す必要があると判断し、全社横断規模のUDワーキンググループを発足させるに至ったのです。

このワーキングには各部門の中堅若手技術系社員や48時間デザインマラソンに参加した人など幅広い職種の人が集まっています。現在このメンバーを3つのチームに分け、製品ジャンルにとらわれずそれぞれ別の視点・テーマを設定し、取り組みの現状列挙、そこから浮かび上がる「ヤマハならではのUD」を抽出するべく、活発な議論を行っています。

最後に、10月の国際大会でその成果を見て頂きながらヤマハUDに関してみなさんと会話を持てることを楽しみにして、締めくくりとさせていただきます。

世界の UD 動向

■民放連で地デジ CM 字幕付与へ向けたワーキンググループが設置されました！

テレビ CM 字幕の付与については、IAUD としても余暇の UD プロジェクトを中心に活動してきましたが、先月、民放連で第一歩といえる動きがありました。民放連地上デジタル放送特別委員は 2 月 15 日に行われた情通審「地上デジタル放送推進に関する検討委員会」の会合で、CM の字幕付与に向けてワーキンググループを設置し、検討を開始したことを明らかにしました。

発表によると、まずは「クローズドキャプション」でやるのが望ましいが、これを運用するには、放送局側で設備の改修が必要になり、在京のキー5局でも局ごとに改修のハードルの高さが違うため、それを踏まえた検討や、スポンサーや広告会社など関係者との調整が必要で、今後の進め方としては、モデルとしてクローズドキャプションの CM を制作し、聴覚障害の方やスポンサーなどへのアンケート調査を想定しており、現在はそれに向けた準備段階のため、キー局 5 社が揃って開始するというより、できる局からやっていくとの考え方が示されました。

今回の動きについては IAUD の活動もどこかでトリガーとして一つの力になったと考えられます。まずは第一ステップという段階ですが、引き続きウォッチし今後の動きに期待していきたいところです。

■「第 4 回サステナブルデザイン国際会議 2009 Destination 2023」開催

Newsletter12月号で会議の概要を案内しましたが、以下のとおり、詳細内容をお知らせします。



日 時： 3月13日(土)、14日(日)

テーマ： 社会イノベーション進行形 / Social innovation-ing

【基調講演会「社会イノベーション・フォーラム」】 3月13日 (土)

会 場： 桑沢デザイン研究所1Fホール

(東京都渋谷区神南1-4-17 地図：www.kds.ac.jp)

第1部 社会イノベーションとは何か イノベーションの生まれる土壌

◎基調講演 「犬と鬼」 アレックス・カー 東洋文化研究者、著述家

第2部 ソーシャル・イノベーション実践

◎講演1「ソーシャル・イノベーションに向かって」熊野 英介 アミタ株式会社 代表取締役社長

◎講演2「リサイクルから第二資源という視点」黒崎 輝男 流石創造集団株式会社 CEO

◎講演3「自分を生きる？」西村 佳哲氏 プランニング・ディレクター

第3部 まとめ 益田 文和 サステナブルデザイン国際会議実行委員

【分科会「社会イノベーション × デザイン」】 3月14日 (日)

会 場： 東京ミッドタウン・デザインハブ インターナショナル・デザインリエゾンセンター

(東京都港区赤坂 9-7-1 ミッドタウン・タワー5F)

◎セッション1 「地方、農業 × デザイン」

プレゼンター： 中原知里 (田舎会社東京支店)

ファシリテーター： 津田和俊 (大阪大学大学院工学研究科特任研究員、Suitendo代表)

◎セッション2 「共有 × デザイン」

プレゼンター： 須田 将啓 (株式会社エニグモ代表取締役、共同最高経営責任者)

ファシリテーター： 本田 圭吾 (専門学校 桑沢デザイン研究所 専任教員)

◎セッション3 「連携 × デザイン」

プレゼンター:本村 拓人(株式会社Granma代表取締役社長)、西村 琢(ソウ・エクスペリエンス代表取締役社長)

ファシリテーター: 酒井 良治(日本産業デザイン振興会)

◎クロージングセッション 「Destination 2010-2022に向かって」

【交流会「サステナブルデザイン国際会議 × PechaKuchaNight」】13日(土)

レセプションパーティでは、「サステナビリティ」や「ソーシャル・イノベーション」をテーマとしたシリアルプレゼンテーションを行います。活動の規模にかかわらず、20スライド×20秒で活動を報告し合います。

※申込み受け付けはすでに終了しています。以下の主催者サイトもご覧ください。

■東京六本木で「インクルーシブデザイン・ノウ」開催

インクルーシブデザインの現在と、日本における実践ワークショップを紹介するフォーラムです。デザインを通してどのように魅力的で成熟した未来をつくっていくことができるのか。ユーザー参加型のデザイン・ワークショップの方法論や成果を共有し、社会にむけての具体的な提案についても考えます。



日時: 2010年3月16日(火)13:30~17:30(受付12:30~)

会場: 東京ミッドタウン・デザインハブ インターナショナル・デザインリエゾンセンター
(東京都港区赤坂 9-7-1 ミッドタウン・タワー5F)

参加費: 1,000 円

主催: 財団法人たんぽぽの家

共催: 九州大学

協力: エイブル・アート・ジャパン

【プログラム概要】

●基調講演 1

「インクルーシブデザインと社会」 平井康之(九州大学芸術工学院准教授)

●基調講演 2

「多様なユーザーとつくるデザインの創造性」 荒井利春(金沢美術工芸大学教授)

●ワークショップ報告

①「インクルーシブファッション」 水野大二郎(京都造形芸術大学講師)

②「共通言語の発見とデザインの構築 ー医療から動物園までー」

小林大祐(京都大学大学院情報学研究所)

③「みんなの美術館プロジェクト」 岡崎智美(横浜市民ギャラリーあざみ野 職員)

④「もう一つの奈良らしさを考える観光デザイン」

山本善徳(ヒューマンヘリテージ株式会社代表取締役)

⑤「インクルーシブアーキテクチャー」 家成俊勝(ドットアーキテツク代表)

●ディスカッション: 荒井利春×平井康之×播磨靖夫

*プログラムの詳細はこちらまで↓

*申し込み先:財団法人たんぽぽの家 E-mail. inclusive@popo.or.jp

Tel. 0742-43-7055 Fax. 0742-49-5501 〒630-8044 奈良市六条西 3-25-4

■佐賀県で「第5回ユニバーサルデザイン全国大会 in 嬉野」を12月に開催

全国で広がるUDの先進的な取り組みの紹介・情報交換などを通じて、より一層のUDの普及・推進を図るため、「第5回ユニバーサルデザイン全国大会 in 嬉野」が次のとおり開催されます。

日時：2010年12月21日（火曜日）～12月22日（水曜日）

場所：佐賀県嬉野市公会堂 他

主催：佐賀県、嬉野市他

内容：基調講演、分科会、トークセッション、交流会、現地視察、各種展示など

詳しくは以下のサイトもごらんください。

<http://www.saga-ud.jp/taisei/conference/index.html>

【UD2010 ウォッチング】

●論文要約（アブストラクト）の応募ありがとうございました。

今秋開催される「第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2010in はままつ」での論文募集が先月2月15日（月）で締め切られましたが、特に海外からの応募の増加が目立ち、2006年を大きく上回る応募をいただきました。

すでにアブストラクトの審査結果が応募者に通知されましたので、本論文の執筆にとりかかっている方も多いと思いますが、国際会議での活発な議論が期待され、大変楽しみです。

以下の国際UD会議のサイトでは、本論文の投稿システムも間もなく開設される予定ですので、ご確認ください。

<http://www.ud2010.net/papers/index.html>

<会員の皆さまへお知らせ>

●IAUD Newsletter のバックナンバーを一般公開しました。

本誌は2008年4月からIAUD会員の情報誌として毎月発行してきましたが、UDの普及と実践というIAUDの社会的な役割をさらに進めるため、発刊より3か月以上経過したものについてIAUDのWebサイトにて一般公開をしました。会員の皆さまも会員サイトへのログインなしでご覧いただけますので、これまで以上に愛読、ご活用いただきますようお願いいたします。

●「IAUD UD マトリックス ユーザー情報集・事例集」好評発売中！

本書は、製品開発や教育の現場など幅広い利用シーンにおいて、多様なユーザーの理解や開発効率化の助けとなるツールをめざしたものです。ぜひ手許において、製品開発やUD教育などさまざまな場面でご活用ください。

販売価格は消費税と配送費を含め1,200円のところ、IAUD会員の皆さまには会員割引価格として1,000円（税・配送費含む）にてご提供いたしますので、ぜひお早めにお申込みください。

また、本書はすでにお知らせしておおり、IAUD会員以外の方へも販売いたします。会員以外の方についても、学生や学校教育関係の方、および20部以上まとめてご購入いただいた場合は特別割引価格1,000円（税・配送費含む）にてご提供いたしますので、お知り合いの方にもぜひ、お伝えくださるようお願いいたします。



詳しい内容および購入申込みにつきましては下記のIAUD公式サイトをご覧ください。

<http://www.iaud.net/udroom/archives/1001/28-185905.php>

IAUD Newsletter 2009 年度バックナンバー



【4月号】

1. 2008年度活動報告 ～「2009年IAUDユニバーサルデザイン大会 in 東海」より～
IAUD活動紹介 ～中期動計画など／研究開発企画部会活動概要
【PJ/WG活動報告】・住空間プロジェクト ・移動空間プロジェクト
・労働環境プロジェクト ・標準化研究ワーキンググループ
シンポジウム／48時間デザインマラソン／展示会ほか
2. INAXのUDの取り組み
3. 世界のUD 動向:英国・ロンドンで「Include 2009」開催 ほか



【5月号】

1. 特集: **towards2010** 2010年国際会議開催に向けて
～成川新理事(国際会議実行委員長)に聞く～
2. 丹青社が取り組むユニバーサルデザイン～ハード、ソフト、そして心のUD～
3. Case Study・標準化研究ワーキンググループ
～IAUD・UD マトリックスをWeb 化、UD 開発者をいつでもどこでもサポート～
4. 世界のUD 動向:Include2009 参加報告、
【UD2010 ウォッチング】ほか



【6月号】

1. 特集①: **towards2010** 「危機と好機の時代に考えること」
～ヴァレリー・フレッチャー氏からの寄稿
2. 特集②: **towards2010** 「総裁に聞く」
3. 「博報堂ユニバーサルデザイン」新設のご案内
4. Case Study・移動空間プロジェクト
～カーコックピットシームレスインタフェースの研究～
5. 世界のUD 動向: 日本人間工学会第 50 回記念大会「人間工学活用事例展示」



【7月号】

1. 特集: **towards2010** みんなでコミュニケーション！
～静岡県のコミュニケーション支援ボードへの取り組み～
2. ユニバーサルデザインフォントの取り組み
～リムコーポレーションが開発したUni-TypeTM ～
3. Case Study・メディアのUD プロジェクトメディアのユニバーサルデザイン
4. 世界のUD 動向: 日本人間工学会第 50 回記念大会人間工学活用事例展示ほか



【8月号】

1. 特集: **towards2010** 戸田顧問に聞く～初心にかえってブレイクスルーを！
2. 東洋インキグループのUD への取り組み
～誰もが快適に暮らせる社会の実現へ～
3. Case Study: 余暇のUD プロジェクト～CM 字幕大作戦のその後～
4. 世界のUD 動向: キッズデザイン博2009、IFA 国際フォーラム
【UD2010 ウォッチング】ほか



【9月号】

1. 特集: **towards2010** 経済産業省製造産業局デザイン・人間生活システム政策室長に聞く
～ソーシャルデザイン、BOP救済とデザインの可能性～
2. セイコーエプソンのUD 評価の実際と課題
3. Case Study・住空間プロジェクト「UD プラス」と「ワークショップ」
4. 世界のUD 動向: Design For All 財団ニュースレターより、
第3回キッズデザイン賞、受賞作品決定ほか



【10月号】

1. 特集: **towards2010** 鈴木浜松市長に聞く
～心のユニバーサルデザインと「多文化共生」～
2. 鉄道車両のベビーカー対応について(東急車輛製造株式会社)
3. ダイワハウスにおけるユニバーサルデザインへの取り組み
4. Case Study: 食のUD プロジェクト食品パッケージのユニバーサルデザイン
5. 世界のUD 動向: 国連EACAP・バリアフリー高山会議
～住みよいまちは行きよいまち～
【UD2010 ウォッチング】ほか



【11月号】

1. 特集: **towards2010** 山本会長に聞く
～技術革新による可能性と新たなUDの課題～
2. 株式会社アップアローズのCSR 活動～ウェブサイト構築におけるUD～
3. Case Study: 衣のUDプロジェクト衣服のユニバーサルデザイン
4. 世界のUD 動向: 第3回国際UD会議2010 プレイヴェント
「しずおかユニバーサルデザインの絆in 浜松」開催プログラム決まる!
‘Design for all Foundation’ニュースレターより
【UD2010 ウォッチング】ほか



【12月号】

1. 特集: **towards2010** 「京都から浜松へ: ユニバーサルデザインをめぐる考察」
ロジャー・コールマンRCA名誉教授からの寄稿
2. [浜松市の取り組み]: 国際UD会議の開催に向けて～おもてなしの心で～
3. Case Study: 移動空間プロジェクト
「シームレスな移動空間の実現」に向けた取り組み
4. 世界のUD 動向: 「第4回サステナブルデザイン国際会議2009 Destination 2023」開催予定
【UD2010 ウォッチング】ほか



【1月号】

1. 特集①: **towards2010** 岡本議長に聞く
～IAUDの活動を核に全国にUDのうねりを～
2. 特集②: **towards2010** 国際UD 会議プレイヴェント
「しずおかユニバーサルデザインの絆in 浜松」レポート
3. Case study: 余暇のUD プロジェクト
～ラリー・ゴールドバーグ氏記念研究会開催～
【UD2010 ウォッチング】



【2月号】

1. 特集: **towards2010** 荒井利春教授に聞く
～「48時間デザインマラソン」に託す想い～
2. 静岡文化芸術大学(SUAC)におけるユニバーサルデザイン教育・活動
～これまでの10年・これからの10年～
3. 「ユニバーサルキャンピングin 八丈島」がもたらすダイバーシティの浸透
4. Case study: 労働環境プロジェクトはたらきやすさとセキュリティの両立
5. 世界のUD 動向: 「国連ESCAP・バリアフリー高山会議」レポート、
「Include 2011」国際会議開催、
【UD2010 ウォッチング】ほか



【3月号】

1. 特集①: **towards2010** 「The White Imperative」～人間の多様性に対する我々の責務～
シンガナパリ・バララム教授(インド)からの寄稿
2. 特集②: **towards2010** 研究開発企画部会PJ/WG主査対談
～2009年度を振り返りと国際会議にむけて～
3. ヤマハ株式会社 ユニバーサルデザイン「ヤマハにできること」
～2010IAUD 国際会議に向けて
4. 世界のUD 動向: 「サステナブルデザイン国際会議」、「インクルーシブデザイン・ナウ」、
「ユニバーサルデザイン全国大会」、【UD2010 ウォッチング】ほか
巻末: IAUD Newsletter 2009年度バックナンバー

【編集後記】○外の空気は暖かくなり、日差しもやわらかくなってきました。春ですね。少し前まではどんよりとしていた空の色も、明らかに色合いが変わってきました。なぜか心も浮き浮きという感じですが、でも心配なことがあります。毎年この時期になると、大丈夫かなと自分の身体に聞いていること、それは花粉症のことです。今のところ、くしゃみ・鼻水・鼻づまりはありませんが、眼のかゆみを少し感じるようになってしまいました。聞くところによると、誰でも花粉症になる可能性があるらしく、体内に溜まる発症原因物質が一定レベルを超えると発症するという事です。だから昨年が無事だったからといって今年も大丈夫とは言えません。今の私の眼のかゆみは、花粉症の事前警報なのでしょうか。ついに仲間入りしてしまうのでしょうか。戦々恐々としています。(矢)

○私事ながら先月、81歳になる母親を交通事故で亡くしました。郷里の兄から連絡を受けたときにはもう心停止しており即死の状態でした。先月号の編集後記で交通事故による死亡者のうち高齢者の割合が増えているという話を書いたばかりだったので、虫の知らせというか何ともいえない気持ちでした。詳しい状況はプライベートでもあり遠慮させていただきますが、現場検証した警察の方の話では63歳の女性ドライバーが運転する軽乗用車が左折しようとした際、左前方に道路を横切ろうとしていた母を発見し、あわててブレーキとアクセルをふみ間違えたとのことでした。普段から大変用心深い母親だったとはいえ、いくら用心しても高齢でその注意力自体が鈍るということもあるでしょうし、不意の操作ミスという不運が重なったとあきらめるしかありませんが、最近、某自動車メーカーが障害物を検知すると運転操作に関係なく強制的にブレーキがかかる車を発表したというニュースを聞きました。死の直前まで、元気に街中を歩きまわっていた母親の突然の事故死を悼みつつ、自動車の設計や交通システム、街づくりの工夫などでこういう事故を何とか無くせないものか、葬儀を終えて帰る新幹線の車中で考えを巡らせました。

なお、末筆ではありますが、上記のような事情もあり今月号の発行が遅れましたことを、この場をお借りしまして心よりお詫び申し上げます。(葛)

IAUD Newsletter では、誌面を会員の皆さまの UD に関わる情報交換の場と位置づけています。ぜひ、会員企業の UD 商品開発事例や PJ/WG の活動成果事例等の情報をお寄せください。また、国内外の UD 関連イベント、シンポジウム等の開催情報もお知らせください。ご連絡は、news@iaud.net へ直接、メールをお送りいただくか、事務局あるいは情報交流センターまでお問い合わせいただいても結構です。

無断転載禁止

IAUD Newsletter vol.2 No.12
2010年3月12日発行
国際ユニヴァーサルデザイン協議会

事務局 : 225-0003 横浜市青葉区新石川 2-13-18-110
電話: 045-901-8420 FAX: 045-901-8417
e-mail: info@iaud.net
情報交流センター: 104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9
(IAUD サロン) トヨタ八丁堀ビル 4階
電話: 03-5541-5846 FAX: 03-5541-5847
e-mail: salon@iaud.net